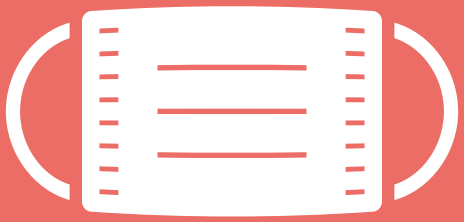
小児科医監修

地域みんなで子どもを育てるために

こうすればできる！

こども食堂 感染症対策 事例集

KANSENSHO-TAISAKU-HANDBOOK



はじめに

「子どもは多くの場合、家庭で感染しているが、幸いほとんどの症例は軽症である。しかし、COVID-19流行に伴う社会の変化の中で様々な被害を被っている」――2020年11月に出た日本小児科学会レポート*のまとめの一節です。コロナは怖いが、派生する被害のほうがもっと怖い――私は、そう警告されているように感じました。

派生する被害の一つが「居場所の喪失」です。家庭や学校に居場所を感じられない子だけでなく、すべての子にとって思いっきり遊べて、受け入れられる時間と空間は貴重です。それが子どもの健全な育ちを支えます。が、今はそれが奪われています。

居場所を作ってきたのが、こども食堂を含む子どもの居場所、地域の居場所のみなさんでした。居場所の喪失によって、子どもたちが将来にわたる影響を受けるかもしれない、それはコロナよりもっと怖いことかもしれない、と考えたとき、こども食堂の再開は、子どもにとって、地域にとって、そして社会全体にとって、大きな意味と意義をもつものに思われてきます。

しかしそのこども食堂が再開しにくい。感染症対策をどこまでやったらいいか、わからないからです。目に見えない新型ウイルスの脅威に日本中が覆い尽くされ、実際に命を落としてしまう人も出ている中で、居場所の運営者がそのリスクを個人で背負うのは、あまりにも負担が大きすぎるからです。

だから私たちはこの冊子を作りました。「どこまでやったらいいか、わからない」から「こうすればできるんだ」への転換を目指して。

こども食堂のみなさんからのご質問にお答えいただいているのは、子どもに詳しく、こども食堂に理解があり、そして感染症に詳しい、小児科医の藤岡雅司先生です。私は相談会の中で、運営者のみなさんが「そうなんだ、それでいいんだ」とホッとされ、硬かった表情が和らいでいくあの瞬間が忘れられません。

みんな、がんばりすぎるほどにがんばってきた。この冊子で、少しでも気持ちが和らげばと思います。

本冊子は、以下の制作物とセットでご活用いただくことを想定しています。

- **こども食堂向け 新型コロナウイルス感染症対策 安全・安心自己点検シート**
  https://musubie.org/wp/wp-content/uploads/2020/12/kansensyo_checkseat.pdf
- **同ステッカー（後援：日本小児科学会、日本小児科医会、日本外来小児科学会）**
  https://musubie.org/wp/wp-content/uploads/2020/12/kansensyo_sticker_fix.pdf
- **番組「こうすればできる withコロナ時代のこども食堂」**
  https://www.youtube.com/watch?v=DHZqSmemh6k

みなさんのお役に立てることを、切に願います。

湯浅 誠
（むすびえ理事長／社会活動家／東京大学特任教授）

* 公益財団法人日本小児科学会予防接種・感染症対策委員会「小児のコロナウイルス感染症2019（COVID-19）に関する医学的知見の現状（第2報）」
http://www.jpeds.or.jp/modules/activity/index.php?content_id=342

監修・藤岡先生からのメッセージ

感染症は必要以上に恐れることはない!

新型コロナウイルス感染症が日本中、いや世界中で流行しています。そのために子どもたちの生活は大きな制約を受けています。一斉休園・休校、クラブ活動の制限、黙々と食べる給食、幼児のマスク着用、遊び場の制限など、あげればきりがありません。

しかし、子どもたちは日々新しい経験を積んで、成長していく存在です。子どもたちにとっては、今が一番大事。かけがえのない時間です。大人とはまったく違い、今年我慢すればいいというわけではありません。

流行の真っただ中ではありますが、子どもたちは感染拡大の中心的な世代ではありません。感染者数に占める割合は極めて低く、感染経路もほとんどは家庭内、一部が保育所や学校などです。保護者や保育士・教師といった大人からの感染が主なものです。保護者が感染しても子どもが検査で陽性になるのは1割程度であり、子どもはかかりにくいと考えられています。

また、感染しても周囲の大人や子どもにうつすことも少なく、中学生以下の子どもでのクラスターはほとんど報告されていません。さらには、子どもは感染しても多くは無症状か軽症であり、特別な治療を必要とせずに治っています。基礎疾患のない子どもにとって、新型コロナウイルス感染症は普通のカゼと変わりありません。

このように、子どもたちは新型コロナウイルスに感染している可能性は低く、地域における流行にはほとんど関与していません。

こども食堂を運営している方々が、最新の情報を知り、正しくおそれ、適切に対応することが、今こそ必要とされています。地域住民の方々の偏見や不安を解消するためにも、このハンドブックを参考にしていただき、子ども食堂の再開・継続の一助となることを願っています。日本中の子どもたちが当たり前の日常を取り戻すようになるまで共に頑張っていきましょう。

藤岡 雅司

小児科医。富田林医師会感染症対策委員会委員長、大阪小児科医会感染症対策委員会委員、日本外来小児科学会予防接種委員会副委員長、同アドボカシー委員会委員長、日本小児科医会公衆衛生委員会委員、日本小児科学会予防接種・感染症対策委員会委員

感染症対策コンテンツ紹介❶

番組「こうすればできる with コロナ時代のこども食堂」

https://www.youtube.com/watch?v=DHZqSmemh6k

もっと具体的に、もっとディテールを、実際にどうやるのかを目で見て確かめたい――そうしたご要望にお応えするために、番組も制作しました。プロのディレクター・カメラマン・編集者が制作した25分番組です。こども食堂の個別相談会に応じていただいた小児科医の藤岡雅司先生に、実際にこども食堂を訪問していただき、アドバイスをいただいたプロセスを撮影しました。また、小児科学会レポートの作成者の一人である長崎大学教授の森内浩幸先生*からも大切なメッセージをいただいています。

多くのみなさんが、子どもたちから居場所が奪われている現状を憂い、最前線で活動されているこども食堂のみなさんを応援してくれています。ぜひご覧いただき、具体的なやり方とともに、元気と、さらなる一歩を踏み出す勇気を受け取っていただければ幸いです。

なお、本番組は、株式会社ほぼ日（代表取締役社長糸井重里氏）のご寄付により制作されました。深くお礼申し上げます。

*森内浩幸氏（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科小児科学教授・日本小児科学会理事・日本小児保健協会理事・日本小児感染症学会理事・日本ウイルス学会理事・日本臨床ウイルス学会幹事など）

感染症対策コンテンツ紹介❷

「新型コロナウイルス対策緊急プロジェクト特設ページ」

https://musubie.org/corona/

むすびえが発信するコロナウイルス対策の情報をまとめたWEBページです。むすびえが行っている緊急支援や企業連携の取り組み、藤岡先生による「こども食堂オンライン個別相談会」の様子を編集した動画など、さまざまな情報が一目でわかります。ぜひご覧ください。

目次
INDEX

小児科医監修
地域みんなで子どもを育てるために
こうすればできる!
こども食堂
感染症対策
事例集

2 はじめに

3 監修・藤岡先生からのメッセージ

4 感染症対策コンテンツ紹介❶

5 感染症対策コンテンツ紹介❷

6 目次

7 こうすればできる!

8 事例 1 参加者が特定される集団なら、入場時健康チェックなしで運営できる!

10 事例 2 大人も混ざる居場所の交流は、対角線の座席ならできる!

12 事例 3 感染者がいなければ、頻繁に消毒しなくても運営できる!

14 事例 4 根拠のない噂には、医師等と連携することで対応できる!

16 事例 5 60代以上の高齢者の活動参加は、調理スペースならできる!

17 こうしたらできた!

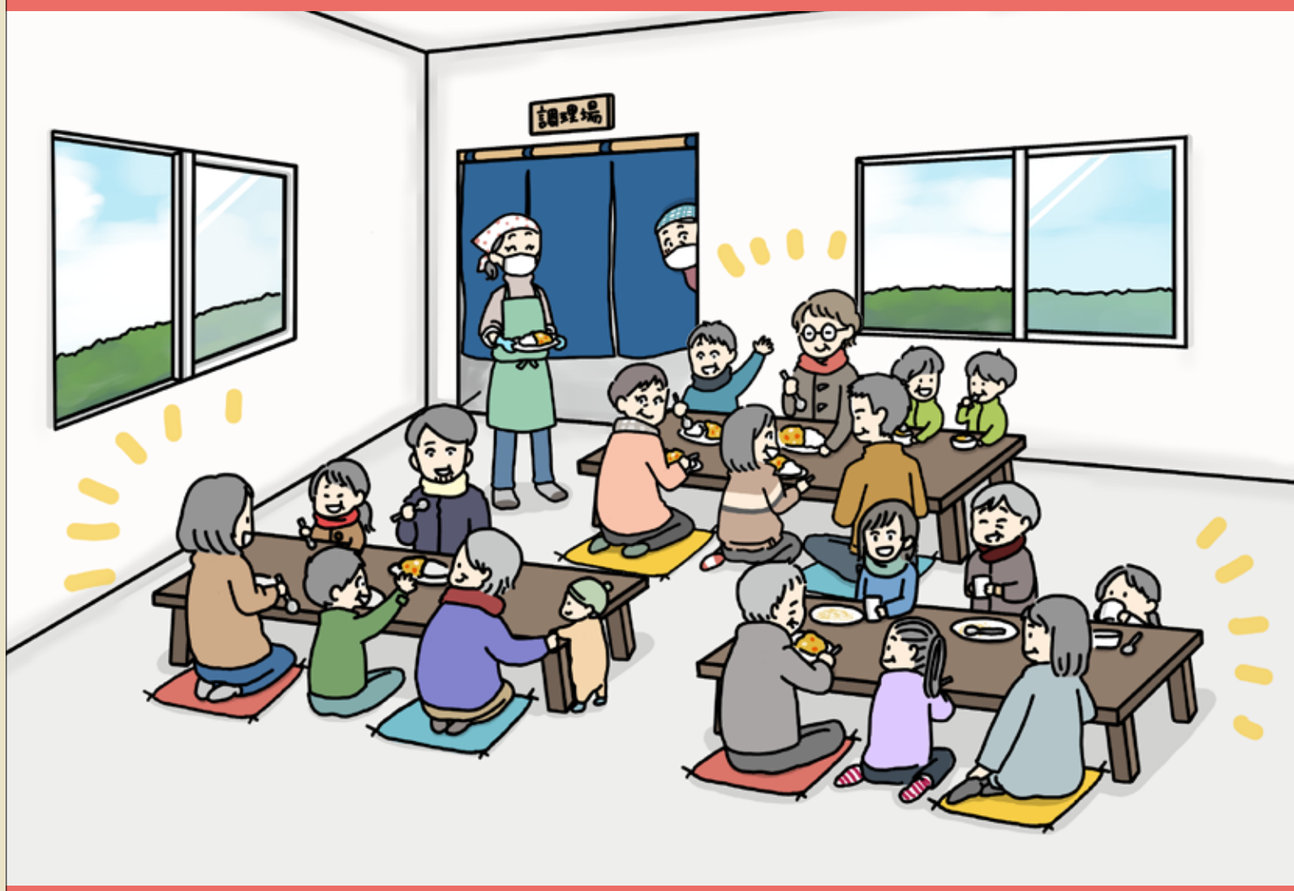
18 相談会後レポート 座布団の指定席で無事にこども食堂を開催!

本事例集は、三菱商事株式会社様からのご寄付で制作しています。
三菱商事様のこども食堂への深いご理解に、感謝申し上げます。

こうすればできる!

全国に再開へのヒントという種を運ぶ風をお送りします。

こちらの内容はむすびえ主催「個別相談会」における質疑（2020年10月22日・29日全5回開催、相談者はこども食堂運営者さん、回答者は小児科医の藤岡雅司さん）をもとに作成しています。



事例 1

参加者が特定される集団なら、入場時健康チェックなしで運営できる！

Q

相談者

さのだい子ども食堂キリンの家
代表 水取 博隆さん
副代表 唐治谷 三智子さん

今まで地域の集会場で開催していましたが会場が使用できなくなりました。そこで、空き店舗を改装して今年12月15日に再開予定※です。対象者は、大阪府の泉佐野市佐野台小学校の児童130人（75世帯）です。小学校の保護者30人で活動しています。1回2学年ごと15人定員、スタッフは3、4人の予定。まず入り口で健康チェック、手洗いをしてもらいます。食事は子どもたちが対面にならないように、同じ方を向いて食べるという方法を考えています。先生からアドバイスを頂けたらと思います。いかがでしょうか？

※大阪府による外出自粛要請のため、1月に延期。

A

多学年で交わって楽しんでください！

こども食堂の利用者が佐野台小学校の親子のみという特定された集団では、小学校で健康チェックをすでにしているので２度目はいりません。利用者が非常に固定したメンバーですので、学校での給食と同じメンバーで外で食べているということですね。違うのは学校の先生か、保護者の方が付くかということ。小学校に登校できているのであればすでに健康チェックは済んでいます。だからその日学校に行ったお子さんはOKと考えてよろしいでしょう。もし学校と違う人たちがその場に集まる不特定多数の集団なら健康チェックは必要です。

みんなが同じ方を向いてパーティションを使う必要もありません。孤食を防止するのもこども食堂の目的のひとつです。私はこの中ではもっとリラックスして運営したらいいんじゃないかなと思います。各学年１クラスしかないような小規模な小学校ですから、いろんな学年での交わりがあった方がいろんな楽しさがあると思うんですよね。こども食堂はカロリーを摂取するためだけのものではありません。楽しいところにしてあげてください。

こうやって運営資金を捻出しています！

むすびえが2020年9月20日から28日に実施した「こども食堂の現状＆困りごとアンケートvol.3」では、感染症対策の他に、資金の不足、会場が使用できないといった課題が浮き彫りになりました。さのだい子ども食堂は、空き店舗を改造して自分たちの新拠点を設けるという先進的なモデルです。固定費を捻出するために、運営スタッフが営業許可を取り、こども食堂手づくりジャムの製造をすることに。泉佐野市ふるさと納税返礼品として販売し、その収益を運営資金に充てています。ひとつのヒントとしてご紹介します。

ふるさと納税（泉佐野市）季節のフルーツ手づくりジャム４種
https://item.rakuten.co.jp/f272132-izumisano/010b325/

事例 2

大人も混ざる居場所の交流は、対角線の座席ならできる！

Q

相談者

さくら子ども食堂
代表 山本浩範さん

福井県の南越前町でこの８月にこども食堂を始めたばかりです。町内100軒くらいの地区が対象で、15から20人くらい集まってきます。子どもは１歳から小学校３年生くらいです。大人は子どもの保護者さんたちです。会場で一同に会して食事をする場合には、机はアイランドタイプで食べるのか、学校みたいに同じ方を向いて食べるのか。それから、小さい子どもはマスクを外したがります。こういう小さいこども含めて参加の皆さんに対してコロナ対策をどこまでしていただければいいのか。この２点についてお伺いしたいです。

A1 大人の座席は指定 子どもはフリーで！

まず座席に関しては、長テーブル（イラスト参照）を使用しておられますが、やはり重要なのは大人が対角線の席に座るということです。大人に関しては場所を移動しないで、誰がどこに座っていたか記録として残しておく。何か起きた場合には、その後の追跡がしやすくなります。子どもたちの座席に関してはフリーで構いません。ここはこども食堂ですので子どもに注目しがちですが、子どもたちに感染を広げるのは大人ですから、大人の方には子ども食堂を維持運営していくために守っていただきましょう。畳の場所では、大人の座る位置を座布団か何かで指定するのはいかがでしょうか。換気も会場の対角線上に気流があった方がいいです。

A2 大人はマスク必須 乳幼児は任意で！

感染に関しては、子どもと大人とは区別してください。中学生以下のお子さんは家庭内での感染率は10％程度。子どもたちは、かかりにくい、うつしにくい、重症化しにくい。ただし大人は別です。学校や幼稚園・保育園等にウイルスを持ち込むのは圧倒的に大人が多いのです。だから大人から子どもたちへうつさないように、あるいは大人同士でうつし合わないように留意しましょう。大人は行動範囲も広いですからね。子どもでもご家族が「感染者あるいは濃厚接触者、健康観察の対象者」になっている場合は当然大人と同じと考えます。

一般にいわれる３密（密閉、密集、密接）対応は大人は大事ですね。それから、手洗い・マスク・換気・健康チェック。

ひとつの場所にいろんな人が入ってくるときに、大人の方はきちんと手洗いか手指消毒をしましょう。手のひらにしっかり取ってまずは指の先を洗います。そうしたうえでこするわけです。乾く段階で消毒されていくんですね。大人の方はマスク必須です。保護者の方も運営側も含めてマスクを着用できないのであればその方の参加あるいはそのご家族の参加は見合わせていただくようお願いしたいところです。子どもたちについては、乳幼児が多いようですしマスクする必要はありません。子どもたちが持ち込むという可能性は低いと考えていいでしょう。

また現在の状況下では参加者の皆さんの名簿はきちんと受付で記録しておくべきです。厚生労働省が開発した新型コロナウイルス接触確認アプリ（COCOA）もできる限り皆さんにご活用いただけるといいですね。

新型コロナウイルス接触確認アプリ COCOA

アプリのインストール方法

App StoreまたはGoogle Playで「接触確認アプリ」で検索してインストールしてください。

Google Play
https://play.google.com/store/apps/details?id=jp.go.mhlw.covid19radar

App Store
https://apps.apple.com/jp/app/id1516764458

運営スタッフの医療費はボランティア活動保険でカバーできます。

ボランティア活動保険・新型コロナウイルスの取扱いの改定について
https://www.fukushihoken.co.jp/fukushi/front/infomation_detail.php

事例 3

感染者がいなければ、頻繁に消毒しなくても運営できる！

Q

相談者

Art Lab Ova 横浜パラダイス会館

代表 蔭山ヅルさん

横浜市内で私設のアートスペースを近隣の子どもたちに無料開放しています。学区内の小学生・中学生を12人まで受け入れています。運営スタッフの大人は3、4人です。子どもたちは放課後に来て、5人くらいがここで夜7時ごろ食事して9時まで居ます。親御さんは遅くまで働いているお宅が多いです。都市部なので地域の感染者何名というニュースはよく耳にします。感染防止のためにサーキュレーター、扇風機、換気扇を使っています。天井からはプラスチックカーテンを吊るして、おもちゃも消毒したり、飛沫が飛んで感染しないように気を遣っています。

A1 プラスチックカーテンは外して換気よく！

会場に入る時に、手洗いの場所が無ければ、アルコール消毒が必要ですね。きちんと手指の消毒をすればあとは中ではそんなに気にすることはないです。テーブルの消毒は食事の時間内に何回もしないといけないというわけではないです。最初にだけきちんと清掃しておけば問題ないと思います。ウイルスは、基本的には細胞の外では生きていけないのです。たとえば1週間に1回開催する場合に、会場をどれくらい消毒しないといけないでしょうか。感染者が会場に入ったのであれば消毒は必要と考えられていますが、次の開催までにおよそ3日以上あれば、開催時にはウイルスは存在していないと考えて構いません。準備に掃除は必要でしょうが、消毒は必須ではありません。

換気用サーキュレーターは外に向けて、会場の中の空気を外に出しましょう。そうすれば自然と新しい空気が中に入ってきます。プラスチックカーテンの目的は不特定多数の中で相手からの飛沫を防ぐというものです。ですから人にうつさないという目的ではここではマスクをすれば十分なわけです。

A2 マスクは不織布がお薦めです！

マスクは医療機関でも非常に足りなくなった時期がありまして、そういう時は繰り返し使うんですよ。とりあえず自分の飛沫を周りに飛ばさないようにするための物なんですね。子どもたちが感染してる可能性が低ければマスクは要らないかもしれませんが、今回のケースは人口が密集している地域で感染者も出ているようですから、子どもたちが家庭内で感染している可能性を否定できません。ここに集まる子どもたちは年長児ばかりですから、参加にはマスクの着用が前提ですね。

手を目とか鼻とか口に持っていかないように、きちんと子どもたちに説明してあげて、それさえしなければいくら汚れてても何を触っても大丈夫なんですよ。ですからここに居る子どもたちがきちんとマスクをして、自分の心掛けとしてむやみに鼻を触ったり目を触ったりしなければ感染するリスクはかなり下がります。

都会から離れた地方で感染者が出ていない地域のご相談では、子どもが感染源になることはないという前提で構わないですよという話をしました。無症状であれば咳も鼻水もないので、飛沫が出ないんですよ。でももし子どもに無症状が多いということで問題になるのであればもっともっと学校でクラスターが起こっているはずなんですね。気づかないうちに子どもから教師がうつされているのなら、感染経路不明の先生の感染が増えるはずですが、そんなことは起こっていません。子どもたちが感染源になることは少ないので子どもたちだけのグループではマスクを取ってもいいですよと説明していました。

ただし今回に関しては、食事を伴う時以外にはマスクをしましょう。シミュレーション実験では、不織布で作ったサージカルマスクと布マスクであれば、布マスクの方が飛沫の透過率は高い。もしみんなおそろいにしたいのであれば、下に不織布のマスクをして上からおそろいのマスクをすれば見た目にはみんな一体感を得られると思います。

その後…

蔭山さん

相談後コメント

「おかげさまで、こどもたちに手洗いや消毒を促す回数も、毎日深夜に行っていたモップ掛けや掃除の回数も減らすこともでき、心身ともに楽になりました。心からお礼を申し上げます」

事例 4

根拠のない噂には、医師等と連携することで対応できる！

Q

相談者

匿名さん

私たちが現在借りているのはデイサービスの施設です。週１回夕方このデイの方々が帰った後に食事や学習、地域の方との交流という目的で使わせていただいていました。しかし、もし私たちのこども食堂から感染者を出すと、デイサービスの利用者の方も利用できなくなる、とてもリスクが大きいということで、今はフードパントリーを実施しています。

こども食堂の開催は、会場の前を通られるご近所の方が中の様子を見て３密対策がなっていないから自粛してくださいというメールが施設に来てから見合わせています。

A1

まず地域の保健所に相談しましょう！

リスク管理として日頃から地域の保健所と連携しましょう。陽性者が出た場合にまずすることは、地域の保健所に相談することです。そうしたら保健所からこういうことをしてくださいという指示が来ると思いますので、それに従って活動団体内できちんと動いていただいたらいいと思います。保健所の方もPCR 検査や濃厚接触者の定義も含めて少しずつ変わってきてはおりますが、一般の方が考えておられるほどに保健所はなんでもかんでもこの人は危ないというふうには言わないものなんですね。

自分たちだけでやるよりも公的なところを巻き込んでやった方が、その後に批判とかあった場合に、いや保健所と連携してこのようにやっていますということが言えると、それだけで状況が変わってくるかと思います。周囲の感じ方も変わるかなと思います。問い合わせも含めて相談されたらいいと思いますね。

A2

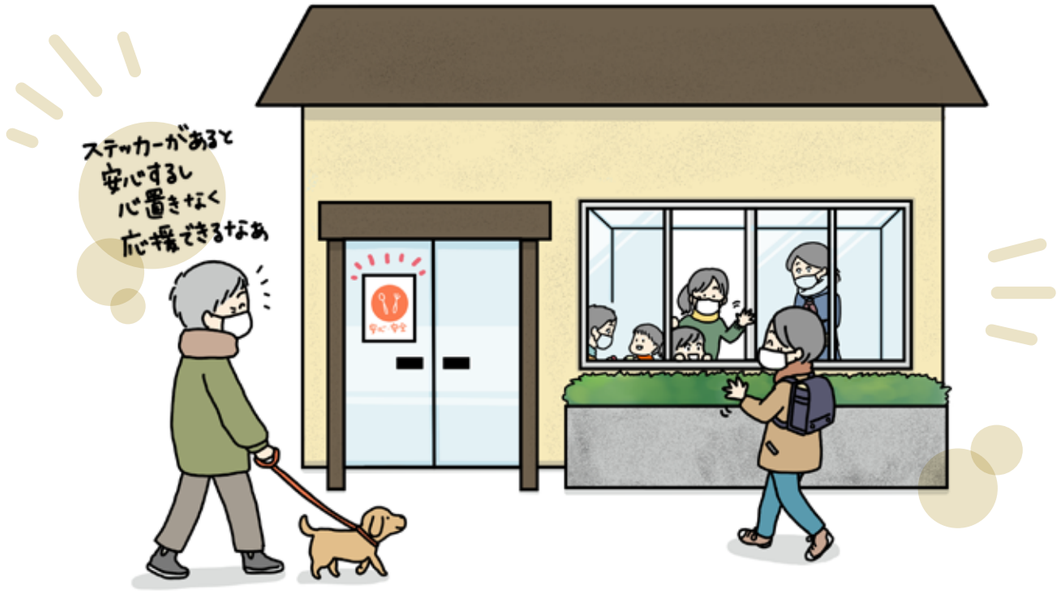
医師と体制を築いてご近所にご理解を！

まず一般論として、その学区の小学校では教師や児童のなかに感染者はいましたか？ 少なくとも２月からその小学校区で感染者がいないということであれば今までしていた３密対策もそれほど必要ではなかったということですね。あくまでも３密、マスク、手洗いに関しては、その集団の中にその場所を使った人を含めて感染者がいるという前提でやっているんですね。感染者がいた時に、うつらないようにやるということ。２人しかいなくて１人感染者だったらやらないといけないですけど。たとえば100人いて100人誰も感染してなかったら何もやる必要はないということなんですよ。それはその時点では分からないけれど２週間経って誰も感染者が出なかったらその集団は何もなかったなということが言えます。

要するに子どもたちが誰も感染してないんだったら、密になろうともマスク外してしゃべっても問題ないわけです。子どもたちが３密やソーシャルディスタンスをやってるから感染者が出てないのではなくて、ただ単にその集団に感染者が１人もいなかったから出てないわけです。

活動団体には小児科のお医者さんは参加されていませんか。地域の方々への対応として小児科医に協力してもらったらいいなと思います。皆さんが安心して活動できるようなバックアップ体制をつくれたらいいですね。子ども会とかスカウト団体とか地域で活動する団体に関わっている医師がいればいいですね。

それから、いろんなイベントで人数制限をしているように、今までフルにたとえば30世帯が参加していたのであれば、まずは10世帯とか15世帯から始めてみましょう。



事例5

60代以上の高齢者の活動参加は、調理スペースならできる！

Q

相談者

匿名さん

高齢者の方々のこども食堂への参加について相談させてください。60代以上の方々を中心に活動している団体はこども食堂を開催することは難しいのでしょうか。やりがいや子どもたちとのつながりという点では、SNSや手紙でのやりとりを通して満足してくださっている方もたくさんいらっしゃいます。しかし、やはり1日でも早くこども食堂を開催したいという60代70代のお元気な方々もいらっしゃいます。アドバイスをお願いします。

A

高齢者と子どもたちは動線を分けましょう！

大人のなかでも、新型コロナに感染して重症化するのは主に60歳以上の高齢者です。

その方々のやりがいを認めるのであれば、子どもたちと接触したいとか、来られた保護者の方々と接触したいというご希望があるのかもしれません。一方では今後こども食堂の運営を安心安全に継続するためにはあまりよくない。新型コロナが落ち着くまでは、やはり接触を控えるようにするべきであると思います。

ただし、あくまでも0か100かという考えではなくて、動線を分けてみてはいかがでしょうか。子どもたちの食事の場や交流の場に立ち入らないよう留意すれば、高齢者の方々も参加できます。たとえば、調理室で活動して、配膳から先は若いスタッフにお願いしましょう。

作った食事にウイルスが付いてそれを食べた人にうつるという可能性は考えなくていいと思います。調理室では年齢の高い方には調理だけをしていただいて、子どもたちの様子を見るのは構わないけれど、子どもたちの中に入っていくのは遠慮してもらった方がいいでしょう。

こうしたらできた！

相談会で得たヒントが実った事例をご紹介します。

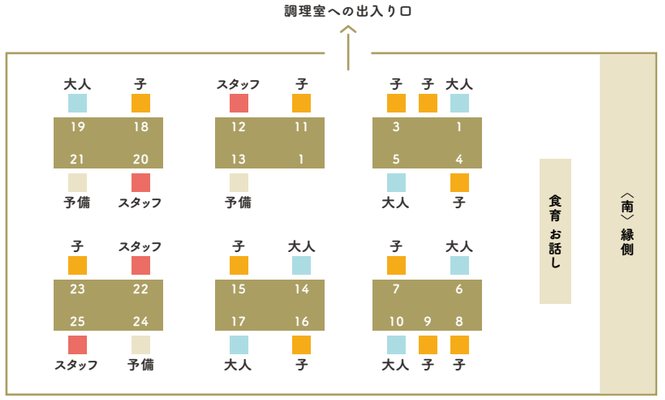
こうしたらできた！ 相談会後レポート

座布団の指定席で、無事にこども食堂を開催！

この写真は、11月22日に開催したこども食堂の食育事業の会場での様子です。
相談会で藤岡雅司先生から「不特定多数の大人が集まるときには、大人の方々にはテーブルの対角線の座席を使用していただけるように座布団を置いて目印にしてはいかがでしょう」という助言を頂きましたので、大人には受付で番号を配り、指定席に着席してもらうことにしました。
当初は会場に一同に会する形式では難しいかなと悩んでいましたが、適切に感染症対策をしたうえで開催できることになり、安心して地域の方々に声掛けすることができました。

事例2の相談者です

福井県
さくら子ども食堂
山本浩範さん



座席指定の図
P.10の回答 A1をご参照ください。

地域のつながりは協働作業で！

福井県南条郡南越前町は、木材産業が盛んな土地柄です。一緒にこども食堂を運営している仲間のスタッフに南条木材という会社の方がおられます。その南条木材さんから材料をご提供いただいて、地域の皆さんと一緒に椅子を作りました。最初はお子さんの付き添いとして来られたお父さんたちも、だんだんとスイッチが入ってきて、子どもたちよりも目を輝かせている方もいらっしゃいました。本活動が、地域のつながり、絆づくりそして故郷南越前町への想いを宿す人づくりになればと思います。とにかく焦らず持続的に活動することが大切だと思っています。

感染症に負けるな!

さくらこども食堂を支える地域の声

1

乳幼児のママたちの支えになっています。

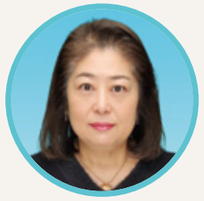
桜町区自治会民生委員　平田博明さん

私は民生委員になって3期目です。桜町は現在147世帯です。この1年半で26世帯増え、12人の赤ちゃんが誕生しました。桜町は一気に開発が進んで住宅地になったところで、比較的若い共働き世帯が多いです。ただし産後すぐから子どもが小学校に入学するまでは、ママたちが人と接する機会が少ないことが課題です。山本さんからこども食堂をやりたいと聞いた時は、いいねと思って「さくら子ども食堂」という名前にしてよと言いました。こども食堂には、若いママたちが子どもを連れて通う姿をよく見かけます。地域で知り合いがいないと不安でしょうが、こども食堂で顔と名前が一致するみたいですよ。

2

じっくり活動していれば信頼を得られるようになります。

たんなん食と福祉のゆるネット代表　野尻富美さん



南越前町のお隣、越前市で「みんなの食堂」を始めて5年になります。地域ネットとして山本さんと意見交換の場を持っています。こども食堂の活動は、半年1年と経つうちにだんだんと地域で市民権を得るようになるんですよね。培ったものを行政をはじめ周囲にお伝えしていくことで信頼を得るようになり、少しずついろんな方が寄ってきてくれるようになります。そしてお互いに寄り合ってきたという感じで今までやってきました。信頼を得るためにやり続けるしかないんですよね。当初の予定とは違うことにも柔軟に進んだり後ろに下がったりしながら。またやっているうちに次どうしようかなということも見えてきます。

こども食堂を開くことが、地域を明るくしています。感染症に負けるな!

地域みんなで子どもを育てるために
こうすればできる! こども食堂感染症対策事例集

2020年12月21日

発行　NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ
理事長 湯浅誠

〒160-0023
東京都新宿区西新宿 1-20-3 西新宿髙木ビル7階
Tel：03-4213-4295
Email：kodomo@musubie.org
公式ウェブサイト：https://musubie.org

監修　藤岡雅司
編集　鈴木桂子
デザイン　和田直也
イラスト　はしもとあや

©2020 むすびえ All rights reserved.

小児科医監修

地域みんなで子どもを育てるために

こうすればできる！

こども食堂 感染症対策 事例集

KANSENSHO-TAISAKU-HANDBOOK

発行

NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ